



人形浄瑠璃

猿八座

平家

女護島

第二段(全)

へいけによごのしま

主催：砂丘館



2017

10

8 (日)

鬼界が島に流された僧・俊寛の
悲劇と絶望を劇的に描いた
近松門左衛門の名作

1回 13:30~15:00

2回 16:00~17:30

*各回ともに公演内容は同じです。

砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

お申込みは裏面をご覧ください。

人形浄瑠璃 さるはちぎ 猿八座

「猿八座」は佐渡に残る「文弥人形」を基本に、数ある説経、古浄瑠璃の中から現代に向く作品の復活上演に取り組んでいます。

「説経」「浄瑠璃」は中世に始まる語り物。操り人形を伴って、京、大坂、江戸の劇場で盛んに上演されました。1700年前後に竹本義太夫がそれまでの浄瑠璃を集大成して「義太夫節」を創始し、今や浄瑠璃の代名詞となりました。義太夫以前の「古浄瑠璃」の多くは荒唐無稽ながら、素朴な表現に捨て難い魅力があります。

文弥人形の語りは17世紀中頃に大坂の岡本文弥が語り、全国に広まった古浄瑠璃の一つ「文弥節」です。佐渡では明治初期まで盲人が語り継いだため、古浄瑠璃の特徴をより強く残していると考えられます。人形は一体の人形を三人で遣う文楽の人形よりも小さく、古浄瑠璃に相応しいテンポの速い動きが可能です。

古浄瑠璃の台本として、太夫(語り手)の語りを聞き書きした「正本」を読み下し、文献や今に残る三味線音楽の曲節を参考に、新たに作譜が必要です。2009年に元文楽の三味線奏者 鶴澤浅造(越後角太夫)が越後を舞台にした説経浄瑠璃「弘知法印御伝記」を復曲、2011年4月からは東京八王子在住の渡部八太夫が座付きの太夫となり、佐渡の文弥節を基本にして古曲の復曲と新作の作譜を続けています。

猿八は座を主宰する西橋八郎兵衛が住む佐渡の地名です。現在は新発田に稽古場を置き活動しています。人形を遣ってみたい方、衣装やかしらを作ってみたい方、随時、座員を募集していますので、お気軽に稽古場をのぞいて見て下さい。

お問い合わせ

電話 080-2012-9115 (西橋)

へいけによごのしま 平家女護島 第二段 (全)

あらすじ

とばのつくりみち 烏羽作道 (赦し文) の場 20分

鹿ヶ谷山荘での平家打倒の密議が発覚し、俊寛僧都は平判官康頼、丹波少将成経と共に鬼界が島に流されているが、高倉天皇の中宮(平清盛の娘)の安産祈願のため恩赦が行われる。能登守平教経(清盛の甥)は石清水八幡宮に代参の途中、鬼界が島の流人召喚の使者丹左衛門、瀬尾等に逢い、俊寛一人赦免なしと聞いて、自らその赦し文を書いて渡す。

きかい しま 鬼界が島の場 70分

鬼界が島に流された俊寛、康頼、成経は赦免を待ちわびて3年になる。成経が島の海女千鳥と夫婦の契りを結んだと聞き、4人が祝の盃を交わすところに、都から赦免の使者を乗せた船が着岸する。瀬尾が読み上げる赦免状に俊寛の名は無かったが、丹左衛門は俊寛の乗船を許す能登守教経の一筆を読み上げた。喜んだ流人3人は千鳥を連れて乗船しようとするが、瀬尾は千鳥の乗船を許さない。俊寛は懇願すると見せかけて瀬尾に近寄り、刀を奪って斬り付ける。瀬尾から妻の死を聞かされた俊寛は島に留まる覚悟で瀬尾の首を討ち、千鳥を船に乗せて独り島に残る。

浄瑠璃 渡部八太夫
人形 金子与八、園部喜八、西橋八郎兵衛、
逸見八里、堀八島、山口彦八
舞台監督 高橋八重

主催：砂丘館 会場：砂丘館 座敷・居間・茶の間
定員：各回30名
料金：一般2,000円 中学生・高校生1,000円
小学生以下無料(保護者同伴にて幼児入場可)
申込み受付開始日9月6日(水)
電話・ファックス 025-222-2676
E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp
*E-mail、ファックスでお申込みの場合は
連絡先(電話番号)、人数を併記して下さい。



渡部八太夫 語り・三味線

1959年東京生まれ。本名渡部雅彦。東京都八王子市在住。東京都あきる野市の小学校に勤務中、地芝居、秋川歌舞伎の復活と秋川子ども歌舞伎の立ち上げに関わったことをきっかけに、邦楽(長唄、義太夫)を始める。1993年東京都無形文化財「薩摩派説経節」を継承する「説経節の会」に入会、杵屋徳波(京屋波)に師事する。1997年「小栗判官一代記」で初舞台。初代彦太夫、五代目小若太夫襲名ののち2005年薩摩派説経節家元十三代目若太夫を襲名。この間、国立劇場などで八王子車人形や江戸写し絵の語り、2002年には佐渡で文弥人形・猿八座の語りを勤める。2011年3月教員を退職して猿八座の座付き太夫として古説経、古浄瑠璃の復活上演のため、新たな浄瑠璃「猿八節」の作曲に取り組んでいます。



西橋八郎兵衛 人形遣い

1948年北海道札幌市生まれ。本名西橋健。新潟県佐渡市在住。大学で演劇学を専攻し、1970年文楽人形遣い吉田義助に入門、吉田義司の芸名で舞台を勤める。1979年文楽を退座し佐渡に移住、文楽人形「大崎座」に入座、その後文楽人形「真明座」に加わり現在に至る。また、1995年「猿八座」を旗揚げし、説経節「信田妻」「小栗判官」など古曲の復活上演や文弥節以外の邦楽(富本節、長唄、多摩説経節、横笛など)洋楽(オペラ、モダンジャズなど)、朗読、舞踏などと国内外で共演。2006年から5年間、元文楽三味線弾き鶴澤浅造と共に新潟市民を募り、越後を舞台にした古浄瑠璃「弘知法印御伝記」を復活上演。2011年4月からは渡部八太夫と共に、伝統人形芝居の継承と可能性を拓く活動を続けている。